

南アフリカチーム・ワークショップ開催報告

南アフリカチームは南アフリカ共和国のステレンボッシュ大学でワークショップを開催しました（2023年9月26~27日）。本ワークショップには、スカーレット・コーネリッセン教授（ステレンボッシュ大学）、佐藤千鶴子研究員（アジア経済研究所）、細井友裕（東京大学）の3名全員が参加しました。

南アフリカチームは2023年7月から8月にかけて大規模なオンライン調査を行い、南アフリカの人々がコロナウイルスにどのように対応したのかについてデータを集めてきました。本ワークショップでは調査データから明らかになった諸点について活発な議論が行われました。調査からは大きく3点の発見が得られました。第1にコロナウイルスに対する脅威認識は、経済的な困難や公共サービスの不足などの問題に比べると低いことが分かりました。第2に、政府に対する信頼が必ずしも高くないにもかかわらず、人々は政府による感染防止策や社会保障による救済などの政府の対応を高く評価していることも分かりました。最後に、家族やコミュニティー、市民社会などのサポートもコロナによるストレスの緩和に大きく貢献していることが分かりました。議論の結果は10月7日に名古屋で開催された日本アフラシア学会で報告されました。

以上の成果を踏まえ、チームはさらに詳細な調査に関して議論しました。南アフリカチームは、従来の研究で見落とされがちであった中間層の人々に注目し、少数の協力者に対する詳細な対面の質問調査を行い、人々がコロナウイルスや感染防止策に起因するストレスにどのように対処したかを探ることにしました。ワークショップでは、質問内容に加え、協力者へのアクセス、倫理的配慮など多岐にわたる点が議論され、2023年度後半に研究を前進させることが決まりました。

本ワークショップにより南アフリカチームの研究は大きく前進しました。今後も、南アフリカチームは緊密に連絡を取り合いながら研究を前進させていくことで一致しました。

